

## 父親の役割と子育て参加

——その現状と規定要因、家族への影響について

石井 クンツ 昌子

(お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授)

### 1. はじめに

近年、日本では少子化対策の一環として父親の育児・子育て参加が啓発されてきた。またワーク・ライフ・バランスという観点から、男性の長時間労働も見直され、父親の家庭生活を含むライフスタイルの変化が推進されてきている。しかし、現実を目を向けると、父親の家庭内における役割は限定されており、子育て参加も母親に比べると少ない。その一例として、父親の育児休業取得率はいまだ0.5%と、母親の72.3%よりかなり低い(平成17年度女性雇用管理基本調査)。

このような現状を踏まえ、日本では1990年代に入ってから父親に関するさまざまな研究が行われてきた。これらの研究は主に3つに分類される。第一に、父親の子育て参加の現状についてである。第二に、多くの先行研究では父親の子育て参加を規定する要因に焦点をあてている。第三の研究としては父親の子育て参加の家族への影響についてである。本稿ではこれらの研究動向を概観しながら、今後の父親役割研究の課題を探っていきたい。

### 2. 父親の子育て参加は上昇したのか

日本では父親の育児参加が求められる傾向があるが、はたして現代の父親は以前の父親と比べて子育てを多くしているのだろうか。米国ではこの点についての議論が盛んである。父親の子育て参加は1920年代から1980年代にかけて上昇してきた

こと(Lambほか 1985)を示唆する研究がある一方、LaRossa(1988)は歴史的な視点から父親の子育て参加を推奨する「文化」(culture)と実際の子育て「行動」(conduct)のギャップに注目し、米国では「父親文化」が先行しているが父親の子育て参加は必ずしも多くなってきているわけではないと言及している。

高度経済成長期の日本の父親の多くは家庭を顧みずひたすら外で働いていたがバブル経済崩壊以後、永年雇用制の消失や少子化とともに父親の家庭内での役割が見直され、父親の子育て参加を望む声が非常に高くなってきた。しかし、現実には父親の子育て参加が過去15~20年間で上昇してきたとは言い難い。牧野ほか(2006)の国際比較調査によれば、日本の父親が平日子どもと過ごす時間は1994年のデータでは平均3.32時間であったが2005年には3.08時間に減少している。また日本の父親と母親の子育て時間の格差は顕著で、米国、フランス、スウェーデン、タイ、韓国と比べると4.49時間と一番大きく、1994年の4.12時間より上昇している。また1999年の男性育児休業取得率は0.42%であり、2002年は0.33%、2004年は0.56%、2005年は0.5%とほぼ横ばい状態である。

このように男性の子育て参加率は上昇していないが、父親の子育て参加意識は高まってきていると言えよう。牧野らの研究でも日本の約4割の父親は「子どもと接する時間が短い」と悩んでおり、「平成12年度子育てに関する意識調査事業調査」(こども未来財団 2001)でも、15歳未満の子どもを持つ父親の51.3%が男性も育児休業を取得

するべきと答えている。これらのデータを見ると、日本ではLaRossa (1988) の主張する父親の子育て文化は形成されつつあるが、実際の子育て行動はいまだ増えていないのが現状であろう。

### 3. 父親の子育て参加を規定する要因

この分野の日本における研究は米国の研究（石井クンツ 1998）をモデルにしたものが多いので、ここでは米国の研究において抽出された主な規定要因の概念をもとに、日本の父親研究をレビューする。

#### (1) 相対的資源差

##### (Relative Resources)

この仮説では夫婦の勢力関係が夫と妻の「資源」により左右されることを前提として、より資源の少ない配偶者が不利な立場にいることから子育てや家事などのアンペイドワークをより多くすると考える。通常、「資源」は学歴や収入により測定されるために、夫であれ妻であれ、これらの資源を相対的に多く持つ場合、子育てや家事に参加する割合が低くなるとされる。この仮説は男性の子育て参加のみならず家事参加を規定する要因として検証されさまざまな結果が報告されている。米国の研究では妻の収入が高いほど夫の家事参加の割合が高くなるという結果が提示されている（Ishii-Kuntz and Coltrane 1992など）。日本では、収入割合が高い妻を持つ男性は育児参加をより多くしている（数井ほか 1996）が、相対的資源差は男性の育児参加に直接影響していないという結果もある（Ishii-Kuntz et al. 2004）。

#### (2) 時間的余裕

##### (Time Availability)

時間的余裕仮説によれば、家庭内役割分担を決定する際により「自由」に使える時間がある配偶者が家事や子育てを行うとされる。通常、時間的余裕は夫の就労・通勤時間や妻の就労の有無で測られ、父親の就労・通勤時間が短いほどあるいは母親が専業主婦ではなく就労している場合に男性

の子育て参加がより増加すると考えられている。米国の研究ではこの仮説を支持する検証結果もあるが、反対に時間的余裕は父親の育児・子育て参加へ直接影響を与えていないという結果も出ている（Hood 1983）。日本の研究では時間的余裕に関してはほぼ一致した結果が得られている。すなわち、父親の就労時間が短いほど、また母親が就労している場合は父親の子育て参加度が高くなるということである（Ishii-Kuntz et al. 2004; 加藤ほか 1998）。

#### (3) 性別役割分業観

##### (Gender Ideology)

この仮説によると、「男性は外で働き、女性は家庭を守る」といった伝統的な性別役割分業観を支持せず、女性の社会進出についてリベラルな考えを持つ父親ほど子育て参加をしている。性別役割分業観に関しては米国の多くの研究で検証されてきたが統一した知見は出されていない。例えば、進歩的な考え方を持つ父親はより子育て参加をしているという結果が報告されているが（Ishii-Kuntz and Coltrane 1992）、その一方、ジェンダーイデオロギーと父親の子育て参加の相関は低いという結果も出ている（Bartkowski and Xu 2000）。日本では性別役割分業観は父親の子育て参加へ影響を与えていないという研究結果が多い（Ishii-Kuntz et al. 2004）。

#### (4) 父親のアイデンティティ

##### (Paternal Identity)

父親のアイデンティティ仮説は通常父親役割に対する重要感として捉えられていて、父親役割を重要視している男性ほど子育て参加をするという考え方である。この関係は非常に簡潔明瞭だが、アイデンティティ仮説を支持する結果（Fox and Bruce 2001など）より、支持しない結果（Maurer, Pleck and Rane 2001）のほうが多い。日本では父親のアイデンティティに焦点を置いた研究は少ないが、父親の子育て参加の質的研究から、子育て参加を積極的にしている父親にとって父親役割は自分のアイデンティティの重要な一部であると

いうことが明らかになっている (Ishii-Kuntz 2003)。

(5) 家族・親類・友人とのサポートネットワーク  
(Support Network of Families,  
Relatives and Friends)

家族や親類・友人とのサポートネットワークがどのように夫婦間役割分担に影響しているのかを最初に研究したのはBott (1971) である。Bott理論によれば、家族や親類・友人などから子育てや家事の援助を得ることが可能な母親ほど夫の子育て参加を必要としない。その結果、父親の子育て参加の割合は低くなる。日本の父親の子育て参加に対してBott理論を直接応用したIshii-Kuntz and Maryanski (2003) によると妻が夫以外の周りの家族、親類、友人などから子育てを支援してもらえる場合は夫の子育て参加は少なくなるという結果が出ている。

(6) 家庭内需要  
(Household Demands)

家庭内における父親の子育て参加の需要度は子どもの数や年齢、親との同・別居により測定される場合が多い。この仮説によると、子どもの数が多い、末子の年齢が低い、また親と別居している家庭の場合は全体的な子育て量が多くなり、夫婦で協力して子育てをしなければならない状況にあることから、父親が子育てに参加する割合が高くなるとされる。米国の研究では子どもの数が多いほど、また末子の年齢が低いほど父親の子育て参加は多くなるという結果 (Pleck 1985) もあるが、反対に子どもの年齢が高い父親のほうが子育て参加をしているという結果 (Coltrane and Ishii-Kuntz 1992) も報告されている。日本では、末子の年齢が低いほどあるいは子ども数が多いほど手がかかるので父親が子育てにより多く参加するが (Ishii-Kuntz et al. 2004; 加藤ほか 1998)、反対に子ども数が少ないほど父親の子育て参加の割合が高いという結果も出ている (大日向・新道 1994)。また親と同居している父親の子育て参加の割合は低いという結果もある (Ishii-Kuntz and

Maryanski 2003)。

(7) 子育てスキル・知識とスタンダード  
(Child Care Skills and Standards)

Hawkins et al. (2002) は父親の持つ子育てへの「自信」に注目したが、米国の研究では父親が子育てに自信があるほど子育て参加をしていることでほぼ一致している (Ehrenberg et al. 2001)。また父親の子育てや子どもの発達に関する知識が多いほど、子育てスキルも向上し、その結果として子どもとよりポジティブな関係を保つことができると仮定されるが、米国の研究では地域学習などで子育てスキルを習得した父親は子育て参加をする割合がより増えるという結果が示されている (Cowan and Cowan 2002)。しかし、父親の子育てに対する自信や知識は子育てをすることにより生まれてくる可能性もあるので、因果関係を確立するのは容易ではない。

日本では父親の持つ親としての自信や子育ての知識がどのように子育て参加へ影響を与えているのかに関する研究は少ない。しかし、Ishii-Kuntz (2003) は、育児をする父親が子育てに関する知識を増やし親としての自信を持つことでさらに育児への意欲を高めていくプロセスを報告しているので、日本の父親にとっても子育てスキルや知識を高めることは子育て参加の頻度に正の相関があるといえよう。

子育てに関するスタンダード (標準) については、スタンダードの高い父親ほど、子育ての参加割合が高くなるという仮説である。例えば、子どもが部屋の中を散らかしたり、食事中に顔やテーブルを汚したりした場合に、そのような状態を敬遠する「清潔さ」のスタンダードの高い親が (父親であれ、母親であれ)、家事や子育てに参加するのではないかとということである。日本における質的調査では父親のこのようなスタンダードが引き金となり子育て参加をし始めたという事例も紹介されている (Ishii-Kuntz 2003)。

## (8) 職場の環境・慣行

### (Workplace Environment and Practices)

父親の子育て参加を規定する職場に関する要因は就労・通勤時間のみではなく、その職場の環境や慣行も含まれる。米国の父親研究は従来家庭内の要因に焦点をあてたものが多かったが、2000年代に入り、父親の職場環境などを変数に入れる研究が現れてきた (O'Brien and Shemlit 2003)。日本でも父親の就労や職場環境がどのように子育て参加に影響を与えているのかに焦点を置いた研究が多くなってきている (Ishii-Kuntz 1996; 2009)。Ishii-Kuntz et al. (2004) の研究では「職務満足度」を取り上げたが、この変数と育児参加には統計的に有意な関係は見られなかったものの、職場に対しての満足感が低い父親ほど育児をしているという方向性が見いだされた。また育児休業を取得した日本の父親へのヒアリング調査によれば、男性が育児をすることに関しての職場の上司や同僚の理解、あるいは職場で既に育児休業を取った男性がいる場合には育児休業を取得しやすかったという報告 (Ishii-Kuntz 2003) もあるので、男性の職場における「ファザー・フレンドリー」な環境や慣行は父親の子育て参加を促す要因であると考えられる。

以上の研究から得られた知見を整理すると、米国でも日本でも研究結果が完全に一致していない部分が多々あることがわかる。これは各研究における調査対象者の多様性や分析手法の違いから生じているのであろう。しかし父親の子育てを規定する要因について日米比較をすると、米国では父親の意識や労働時間・環境の両方が影響している場合が多いが、日本における研究では意識より労働時間などの構造的要因のほうが重要であることがわかる。

## 4. 父親の子育て参加の家族への影響

父親の子育て参加に注目するひとつの理由として、父親が子育てをすることにより何か良い影響が (特に子どもにとって) あるのではないかとい

うことがあげられる。石井クンツ (2008) は父親の子育て参加がどのようなメカニズムで子どもへ影響を与えているのかについて次の3点をあげている。第一に父親と一緒に過ごす時間が多い子どもは母親と父親という性格や考え方が異なる大人との接触機会を与えられる。すなわち子どもは両親と接触することで人間関係の多様性を学び取ることができる。第二に母親あるいは父親と一緒にする行動から子どもの生活範囲が広がることがあげられる。その結果、人間関係や対人関係について学ぶ機会が多くなり、子ども自身の社会性も増加し、ネットワークも拡大する (Ishii-Kuntz 1998)。第三に、間接的ではあるが、父親の子育て参加は母親の育児不安や子育てストレスを軽減することにつながるため、母親の精神的な安定さが子どもの社会性に良い影響を及ぼすということである。この点については牧野 (1988) の育児不安が父親の共同育児などにより緩和されるという結果からも明らかである。ここではこれらの論点も踏まえながら父親の子育て参加のさまざまな影響について述べる。

### (1) 子どもへの影響

米国では父親の子育て参加がどのように子どもへ影響しているのかに焦点を置いた研究は数多くある (Parke 2002) が、Pleck and Masciadrelli (2004) はこれらの研究の問題点を三つあげている。第一にこれらの研究の多くが母親の子育て参加をコントロール変数として入れていない。つまり父親の子育て参加と子どもへの影響に関しては母親の子育て参加も関連していることから、量的分析の場合は、母親の子育て参加頻度などをコントロールする必要があるということだ。第二に父親の子育て参加の子どもへの影響に関しては母親から収集されたデータのみを使った研究が多いことである。第三にこれらの研究では横断調査データの分析が多く、縦断調査は数少ないということだ。父親の子育て参加の子どもへの影響は長期的に現れることが多いために、横断調査では把握しにくいという問題点である。

これらの問題点を考慮しながら米国の先行研究

をまとめると、母親の子育て参加をコントロールし、父親と子どもからの縦断データを分析した研究において、父親の子育て参加は子どもへポジティブな影響を与えていることが明らかになっている。例えば、父親と多くの時間を過ごした女兒は、そのような機会が少なかった女兒に比べて成人になってからの精神状態が良好である (Wenk et al. 1994)。また父親からの愛情を多く受けて育った子どもは成人後の自尊心が高く、人生に対する満足感も高い。さらに、父親の子育て参加の頻度は成人後の子どもの教育・経済的な業績と正の相関があり、子どもの非行とは負の相関があることも明らかになっている (Harris et al. 1998)。さらに、Aldous and Mulligan (2002) によれば、父親とポジティブな関わりを持つ男児の問題行動は少ない。

日本でも父親の子育て参加と子どもの発達に関する研究は多いが、母親の子育て参加をコントロールした分析や縦断調査は少ない。これらの限界点はあるが日本の研究で明らかになっていることは、父子遊びの多い子どもは情緒性、社会性、自発性 (中野 1992) あるいは独立意識 (小野寺 1993) が高い、育児をする父親を持つ3歳児は情緒的・社会的発達が良い (加藤ほか 2002)、父親とかかわりが多い幼児は友人ネットワークが広い (Ishii-Kuntz 1998) などである。父親と就学児に焦点を置いた研究でも、父親と接触時間の多い子どもは少ない子どもと比べて友人が多く、大人に対しても友好的な態度をとれるなどの社会性が豊かであり (Ishii-Kuntz 2004)、自尊感情も高い (石井クンツ 2008)、子どもの習い事に関する意識が高い父親はその習い事に対して行動する傾向が強く見られ、ひいては子ども自身の習い事における能力感を高めること (佐々木 2008) などのポジティブな結果が得られている。

## (2) 妻への影響

男性の子育て参加が妻へどのような影響を与えているかについての米国の研究によれば、夫の子育て参加の割合が低い場合、妻の夫に対する「怒り」が上昇すること (Ross and Van Willigen

1996)、また夫の子育て参加が妻の期待する頻度より低い場合は妻が不公平感をつのらせることやストレスを溜めること (Milkie et al. 2002) が明らかになっている。日本の質的研究では夫が子育てに積極的に参加することにより、妻と夫との交渉頻度が増え、その結果、妻は自分の要求を通すことが可能になるためにストレスも低下するということが示唆されている (Ishii-Kuntz 2003)。

## (3) 夫婦関係への影響

男性の子育て参加の夫婦関係への影響に関しては相反する仮説が2つのレベルで立てられる。第一に夫婦関係は夫の子育て参加から影響を受けていると同時に、男性の子育て参加を促す要因にもなりえる (Pleck and Masciadrelli 2004)。第二に夫の子育て参加が必ずしも夫婦関係を良好にするとは限らない。夫婦間で子育てに関する意見の食い違いがあり合意に達することが不可能であれば夫の子育て参加は夫婦関係へ負の影響を与える可能性がある。その一方、夫が子育てに参加することにより、夫婦に共通の話題ができたり、妻の精神的な支えになれば夫婦関係は良好になるであろう。米国の研究では夫が子育てにより多く参加している場合、夫婦間の衝突や意見の食い違いが多くみられるという結果がある (Crouter et al. 1987)。日本においては夫の子育て参加が夫婦満足度へポジティブな影響を与えていることが明らかにされている (木下 2004) が、質的研究では育児をする夫と妻の衝突の事例なども紹介されている (Ishii-Kuntz 2003)。

## (4) 父親自身への影響

子育てに積極的に参加する父親ほど仕事と家庭の両立についてストレスを感じる事が明らかにされてきたが (Baruch and Barnett 1986)、そのストレスは親としての満足感へは影響がないこともわかっている。また、父親は子育てをすることにより次世代の若者を育てようという欲求を持つことが多く、子どもの成長後の父親の地域活動や学習への機会が増えることも示唆されている (MaKeering and Pakenham 2000)。日本では父

親が育児・子育てに参加することにより自分が成長し仕事に関しての柔軟性が高まったなどの事例が質的研究で報告されている (Ishii-Kuntz 2003; 石井クンツ 2008)。また、子どもの習い事を見学して子どもの成長を感じることで、父親自身の生きる張り合いや日ごろのストレスの解消につながっていることも明らかになっている (佐々木 2008)。

父親の子育て参加の影響が特にポジティブに表れているのは子どもに対してである。妻、夫婦関係、父親自身への影響に関してはプラスとマイナスの部分がある。しかし、先行研究を概観すると父親の子育て参加のネガティブな影響はほとんど短期的なものであり、長期的にみれば父親の子育て参加はポジティブな影響を妻へ、夫婦関係へ、そして自分自身へ与えているという結果が得られている場合が多い。

## 5. 今後の父親役割研究の課題

父親の家庭内役割や子育て参加に関する研究はさまざまな角度から進んできていることを本稿で明らかにした。これらの多くの研究から得られた知見をもとに、父親研究全般に対しての限界点を以下で述べながら今後の父親役割研究の課題を提示したい。

### (1) 父親の子育て参加の定義と測定

米国と日本における先行研究を概観すると、「子育て参加」という概念の定義が明示されていない場合が多く、「子どもの世話をする」というようなおおまかな変数が使用されている場合が多い。そのため、先行研究から得られた知見の相違などもこの概念の不透明さと測定方法の違いから発しているものが少なくないであろう。そこで、今後の研究ではまず「父親の子育て参加」という概念を明確に定義して、その定義にマッチした変数の測定法について再考する必要がある。

Lamb et al. (1987) は子育て参加をengagement (関与)、accessibility (利便性)、responsibility

(責任) の三つの側面から定義した。「関与」は「世話と一緒に行動することを通しての直接的な子どもとの接触」、「利便性」は「常に子どもとの接触が可能なこと」の行動的側面であり、「責任」は「子どもの成長や行動に責任を持つ」という意識的側面である。日本の研究では主に父親の「関与」に関するものが多く、この概念は通常「子どもの世話」や「一緒に遊ぶ」頻度で測られている場合が多い。しかし、今後の研究では「関与」頻度のみではなく、「利便性」などの側面からの父親の子育て参加を検証することも必要である。

また、父親の子育て参加の測定法は「子どもの世話をする」といった漠然的な変数ではなく、子どもの年齢に則した詳細な親行動に関する変数が必要になるであろう。この例としては乳幼児や未就学児の場合は「おむつを替える」「お風呂に入れる」「食事を用意する」「食事の後片付けをする」「子どもへ本を読み聞かせる」「子どもと一緒に遊ぶ」などがあり、さらに、就学児の場合は「一緒に買い物に行く」「宿題を手伝う」「しつけをする」「一緒にスポーツをする」などがあげられる。

### (2) 理論的展開と発達の必要性

父親の子育て参加に関する先行研究の多くは従来からある仮説の検証に終始しているので新しい理論の展開に欠けることが多い。よって今後の研究課題としては、理論的視点を変える試みが望まれる。その例として社会構築理論、社会資本理論、ファミリープロセス理論、アイデンティティ理論などの応用があげられる。社会構築理論の応用では、父親の子育て参加の意味が広まっていく段階で社会や地域における第三者が父親の子育て参加をどのように定義しているかに注目できる。社会資本理論では子どもの生活や周りに存在する人間関係 (教師、コーチ、隣人など) についての知識を父親の資本とみなすことが可能であり、それが父親の子育て参加へどのような影響を与えているかの仮説を導き出すことが可能である。ファミリープロセス理論では、家族構成員間の距離感や自由度の許容などの概念に注目し父親がどのよ

うに家族と交渉し、親としての義務を遂行していくかの研究につながるであろう。最後に、アイデンティティ理論の応用では父親がさまざまな環境でいかにして「父親」のアイデンティティを構築あるいは固守するかについての研究が可能である。

### (3) 多様な父親に関する研究

多様な人種が共存する米国では、1990年代以前から父親の多様性に注目する研究が多くあった。また人種間の相違のみならず、離婚した父親(Shapiro and Lambert 1999)、単身赴任などで別居している父親(Hetherington and Stanley-Hagan 1999)、継父(Fine et al. 1997)についての研究の蓄積も多い。これらの米国における父親研究に比べると、日本の父親研究は多様性に欠けている。Ishii-Kuntz (2009) は日本における父親研究は中流階層のサラリーマン家庭に絞られていることが多く、自営業や労働者階層の父親に関する研究の蓄積が少ないと指摘している。ライフスタイルや家族関係が多様化する中で今後は多様な父親の経験を踏まえた研究が日本でも必要になってくるであろう。

### 文献

- 石井クンツ昌子, 1998, 「米国における父親研究の動向」『家族社会学研究』10: 135-141.
- , 2008, 「父親と青少年期の子どもの発達——父親は子どもの社会性にどのような影響を与えているのか」耳塚寛明・牧野カツコ編『閉ざされた大人への道——学力とトランジションの危機』金子書房, 125-142.
- 大日向雅美・新道幸恵, 1994, 「父親の育児参加」高橋種昭・高野陽・小宮山要・大日向雅美・新道幸恵・窪龍子『父性の発達——新しい家族作り』家政教育社.
- 小野寺敦子, 1993, 「日米青年の親子関係と独立意識に関する研究」『心理学研究』64: 147-152.
- 数井みゆき・中野由美子・土谷みち子・加藤邦子・綿引判子, 1996, 「子どものかわり、父母比較」牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子編『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房, 98-106.
- 加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子, 1998, 「父親の育児参加を規定する要因——どのような条件が父親の育児参加を進めるのか」『家庭教育研究所紀要』20: 38-47.
- , 2002, 「父親の育児かわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響——社会的背景の異

なる2つのコホート比較から」『発達心理学研究』13: 30-41.

- 木下栄二, 2004, 「結婚満足度を規定するもの」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容——全国家族調査NFRJ98による計量分析』東京大学出版会, 77-292.
- こども未来財団, 2001, 『平成12年度子育てに関する意識調査事業調査報告書』.
- 佐々木卓代, 2008, 「子どもの習い事に対する父親の意識と行動に関する研究——スイミングスクールを対象とした調査から」第18回日本家族社会学大会大会研究報告.
- 中野由美子, 1992, 「3歳児の発達と父子関係」『家庭教育研究所紀要』14: 124-129.
- 牧野カツコ, 1988, 「育児不安の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』10: 23-31.
- 牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子, 2006, 『平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書』国立女性教育会館.
- Aldous, J., and Mulligan, G. M., 2002, "Fathers' Child Care and Children's Behavior Problems," *Journal of Family Issues*, 23: 624-647.
- Bartkowski, J. P., and Xu, X., 2000, "Distant Patriarchs or Expressive Dads?: The Discourse and Practice of Fathering in Conservative Protestant Families," *Sociological Quarterly*, 41: 465-485.
- Baruch, G. K., and Barnett, R. C., 1986, "Consequences of Fathers' Participation in Family Work: Parents' Role Strain and Well-Being," *Journal of Personality and Social Psychology*, 51: 983-992.
- Bott, E., 1971, *Family and Social Network: Roles, Norms, and External Relationships in Ordinary Urban Families*, London: Tavistock.
- Coltrane, S. and Ishii-Kuntz, M., 1992, "Men's Housework: A Life Course Perspective," *Journal of Marriage and the Family*, 54 (1) : 43-57.
- Cowan, P. A., and Cowan, C. P., 2002, "What in Intervention Design Reveals about How Parents Affect Their Children's Academic Achievement and Behavior Problems," Bartkowski, J., Ramey, S. L., and Bristol-Power, M. (eds.), *Parenting and the Child's World*, Mahwah, New Jersey: Erlbaum, 75-98.
- Crouter, A. C., Perry-Jenkins, M., Huston, T., and McHale, S. M., 1987, "Processes Underlying Father Involvement in Dual-Earner and Single-Earner Families," *Developmental Psychology*, 23: 431-440.
- Ehrenberg, M. F., Gearing-Small, M., Hunter, M. A., and Small, B. J., 2001, "Childcare Task Division and Shared Parenting Attitudes in Dual-Earner Families with Young Children," *Family Relations*, 50: 143-153.
- Fine, M. A., Ganong, L. H., and Coleman, M., 1997, "The Relation between Role Constructions and

- Adjustment among Stepfathers,” *Journal of Family Issues*, 18: 503-525.
- Fox, G. T., and Bruce, C., 2001, “Conditional Fatherhood: Identity Theory and Parental Investment as Alternative Sources of Explanation of Fathering,” *Journal of Marriage and Family*, 63: 394-403.
- Harris, K. H., Furstenberg, F. F., and Marmer, J. K., 1998, “Paternal Involvement with Adolescents in Intact Families: The Influence of Fathers over the Life Course,” *Demography*, 35: 201-216.
- Hawkins, A. J., Bradford, K. P., Palkovitz, R., Christiansen, S. L., Day, R. D., and Call, V. R. A., 2002, “The Inventory of Father Involvement: A Pilot Study of a New Measure of Father Involvement,” *Journal of Men’s Studies*, 10: 183-196.
- Hetherington, E. M., and Stanley-Hagan, M. M., 1999, “Stepfamilies,” Lamb, M. E. (ed.), *Parenting and Child Development in “Nontraditional” Families*, Mahwah, New Jersey: Erlbaum, 137-159.
- Hood, J., 1983, *Becoming a Two-Job Family*, New York: Praeger.
- Ishii-Kuntz, M., 1996, “A Perspective on Changes in Men’s Work and Fatherhood in Japan,” *Asian Cultural Studies*, 22 (1) : 91-107.
- , 1998, “Fathers’ Involvement and Children’s Social Network: A Comparison Between Japan and the United States,” *Journal of Family Education Research Center*, 20: 5-16.
- , 2003, “Balancing Fatherhood and Work: Emergence of Diverse Masculinities in Contemporary Japan,” James Roberson and Nobue Suzuki (eds.), *Men and Masculinities in Japan*, London : Routledge, 198-216.
- , 2004, “Fathers’ Involvement and School-Aged Children’s Sociability: A Comparison between Japan and the United States,” *Japanese Journal of Family Sociology*, 16 (1) : 83-93.
- , 2009, “Working-Class Fatherhood and Masculinities in Contemporary Japan,” Lloyd S., Allen K., and Few A. (eds.), *Handbook of Feminist Family Studies*, Los Angeles: Sage.
- Ishii-Kuntz, M. and Coltrane, S., 1992, “Predicting the Sharing of Household Labor: Are Parenting and Housework Distinct?,” *Sociological Perspectives*, 35 (4) : 629-647.
- Ishii-Kuntz, M., Makino, K., Kato, K., and Tsuchiya, M., 2004, “Japanese Fathers of Preschoolers and Their Involvement in Child Care,” *Journal of Marriage and Family*, 66 (3) : 779-791.
- Ishii-Kuntz, M. and Maryanski, A., 2003, “Conjugal Roles and Social Networks in Japanese Families,” *Journal of Family Issues*, 24 (3) : 352-380.
- Lamb, M. E., Pleck, J. H., Charnov, E. L., and Levine, J. A., 1985, “Paternal Behavior in Humans,” *American Zoologist*, 24: 883-894.
- , 1987, “A Biosocial Perspective on Paternal Behavior and Involvement,” Lancaster, J. B., Altman, J., and Rossi, A. (eds.), *Parenting Across the Life Span: Biosocial Perspectives*, New York: Academic Press, 11-42.
- LaRossa, R., 1988, “Fatherhood and Social Change,” *Family Relations*, 37: 451-457.
- MaKeering, H., and Pakenham, K. I., 2000, “Gender and Generativity Issues in Parenting: Do Fathers Benefit More Than Mothers from Involvement in Child Care Activities?,” *Sex Roles*, 43: 459-480.
- Maurer, T. W., Pleck, J. H., and Rane, T. R., 2001, “Parental Identity and Reflected-Appraisals: Measurement and Gender Dynamics,” *Journal of Marriage and Family*, 63: 309-321.
- Milkie, M. A., Bianchi, S. Z., Mattingly, M. J., and Robinson, J. P., 2002, “Gendered Division of Childrearing: Ideals, Realities, and the Relationship to Parental Well-Being,” *Sex Roles*, 47: 21-38.
- O’Brien, M., and Shemlit, I., 2003, *Fathers in the Workplace: Literature Review and Analysis*, Manchester: Equal Opportunities Commission.
- Parke, R. D., 2002, “Fathers and Families,” Bornstein, M. H. (ed.), *Handbook of Parenting*, 2nd ed., Vol. 3, Mahwah, New Jersey: Erlbaum, 27-73.
- Pleck, J. H., 1985, *Working Wives, Working Husbands*, Beverly Hills, CA: Sage.
- Pleck, J. H., and Masciadrelli, B. P., 2004, “Paternal Involvement by U.S. Residential Fathers: Levels, Sources, and Consequences,” Lamb, M. E. (ed.), *The Role of the Father in Child Development*, Hoboken, New Jersey: Wiley, 222-271.
- Ross, C. E., and Van Willigen, M., 1996, “Gender, Parenthood, and Anger,” *Journal of Marriage and the Family*, 58: 572-584.
- Shapiro, A., and Lambert, J. D., 1999, “Longitudinal Effects of Divorce on the Quality of the Father-Child Relationships and on Father’s Psychological Well-Being,” *Journal of Marriage and the Family*, 61: 397-408.
- Wenk, D., Hardesty, C. L., Morgan, C. S., and Blair, S. L., 1994, “The Influence of Parental Involvement on the Well-Being of Sons and Daughters,” *Journal of Marriage and the Family*, 56: 229-234.

いしい・くんつ・まさこ お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授。主な論文に「ワーク・ファミリー(ライフ)・バランス——日米の研究から」(『家族関係学』26, 2007)。家族社会学専攻。  
(ishii.kuntz.masako@ocha.ac.jp)